

グラフィーティ
予備校graffiti

(最終回)

— 私が出会った青春(六) —

目次

ページ

- ・ ㉗ U君、民族の悲劇を背負って・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- ・ ㉘ Y君、日本の近代を辿って・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

- ・ ㉙ 忘れ難い若者たち② — 痛快な、そして楽しい思い出 — 7
 - (A) 「特急あずさ君」の「基礎貫徹」・・・・・・・・・・・・ 7
 - (B) ドストエフスキ読破と「OK」サイン・・・・・・・・・・ 9
 - (C) 「合格判定E」を買った浪人生・・・・・・・・・・・・ 10
 - (D) 「千葉太陽少年団」と「ピーナッツの情熱」・・・・ 11
 - (E) 「^{キュアリアス・ボーイ}curious boy・好奇心少年」、ベストの問い・・・・ 13
 - (F) 「^{かかし}案山子少年」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

- ・ ㉚ Eさんの「笑顔」と、「汚れちまった悲しみ」・・・・・・・・ 17

- ・ 予備校 graffiti・㉗～㉚・余録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

- ・ おわりにかえて
 - 私の浪人時代 — 朝顔の10秒の凝視 —・・・・・・・・・・・・ 22

- ・ 予備校 graffiti・もう一つの「青春」 ㉛・・・・・・・・・・・・ 26

予備校 graffiti ②7

U君、民族の悲劇を背負って

★四十年近く予備校で教えた中で、私が最も強いインパクトを与えられた浪人生は誰かという、在日朝鮮人三世のU君でしょう。この「予備校 graffiti」の第一回目、冒頭で紹介したのも在日三世のKさんでした。間もなく予備校での仕事を終えようとする私の心に最も強烈な印象を残したのが、男女二人の在日朝鮮人三世だったという事実は、何とも皮肉なことであり、また極めて当然のこととも思われます。

★ある年のことです。二学期が始まるや、突然、一人の生徒が私の目に留まりました。クラスの最前列中央。こちらを睨むような鋭い目つき。猛烈な集中力。二学期初めの緊張感漂う教室の中でも、この生徒は抜きん出た緊張感を漂わせているのです。「気合いの入った子だ！」—— 間もなく私は、この生徒がU君であること、「在日」という苦しい事情の中で、「とに角、大学で勉強をしよう！」との決意と共に、予備校に飛び込んできたことを知りました。

★「朝鮮人狩り」—— 皆さんはこの恐ろしい、また愚劣極まりない言葉をご存知でしょうか？ 経済の高度成長期からバブル期にかけて、日本の右翼大学生たちが、「朝鮮人狩り」という名の下に、朝鮮の民族服であるチョゴリを着た小・中・高生を見つけては、その制服を切り裂いたり、そこにいたずら書きをしたりすることが少なからず行われていたのです。現在もなお「ヘイト・スピーチ」として厳存する、日本人が内に宿す醜悪な差別意識の現われです。これを許せない高校生のU君は、彼らを追いかけ、猛烈な反撃を試みていたのです。その結果U君は、十分に勉強の出来ないまま高校生活を送ってしまいます。差別に対する怒りや焦りから、自らを裏社会に追いやってしまう若者も少なくないと言われる中、彼は決意をしたのです。「とに角、大学で勉強をしよう！」。

★予備校の学費は親戚の方から借金をしての背水の陣 —— 二学期から入った上位クラスで、U君が見せた必死の勉強ぶりは周囲の度肝を抜くものでした。例えば千五百ほどの単語が入った「試験に出る英単語」(当時「デル単」と呼ばれたベスト・セラー)を、Uは何と二週間で暗記したとの噂が広まりました。ところが後で聞くと「三日」だとのこと(「試験に出る英熟語」、「デル熟」も同時に暗記してしまったそうです)。このU君のことを、ある日一人の生徒が心配そうに報告してくれました。彼によれば、U君はトイレで血尿を流していたとのこと。健康の塊のようなU君です。スポーツ系の

人が激しい運動をし過ぎた時のように、勉強に集中し過ぎたのでしょう。単語集の半分も終えられず、一年間勉強の「垂れ流し」を続ける浪人生には耳の痛い話です。

★自習室のエピソードも記しておきましょう。ここにはお喋りばかりしていて、周囲に迷惑をかける生徒たちがよくいます。U君はそういう連中と居合わせると、まず「静かにして下さい」と丁寧に頼みます。しかしそういう若者の群れは、注意されると却って突っ張ってしまい、一層騒々しくするものです。このような時、彼は暫く待った後、凄まじい勢いで駆けつけ、「おい、外へ出ろ！」と一喝して相手を黙らせるか、外で「一戦」に及ぶこともあったようです。（「一戦」と言っても、たった「一回」だけでしたよ、と彼は語ります。しかしそれは激しい「一戦」だったようです）。

「Uがいる！」。やがて皆は「恐れ」ではなく、「畏れ」を以って彼を眺めるようになり、自習室は見事な静寂と緊張感の張りつめた勉強の空間となったのでした。エピソードは尽きません。

★民族の悲劇と辛さを背負った一青年の死に物狂いの努力。皆さんはその結果を、東京の或る一流私大で目に出来るでしょう。三十代で経営学部の教授となったU君が、情熱と知性に溢れた素晴らしい授業を展開しています。

授業の解体・学校の崩壊が叫ばれる今。小・中学校を始めとして、予備校を除いた日本の学校の多くでは、生徒が静かに机に座り、先生の話に耳を傾けるという光景はごく少数になってしまいました。大学もその例に洩れません。しかしU君は年度初め、初めての授業の際、大学生たちがざわついていると、黙って教壇に立ち、何分でも何十分でもそのまま立ち続けているのだそうです。教室が静かになった瞬間、初めて彼は口を開くのです。U君の内から発される気迫・オーラが、教室内に染みわたってゆくのが目に見えるようです。私はこのような気迫と情熱を持って講義に臨む教師、このような緊張感に溢れた素晴らしい「瞬間」を学生に与え得る大学教授を他に知りません。

★私は授業の際によくU君の話をします。そして自分が何故受験をするのか自覚の出来ない生徒、大学で何を学んだらよいのか決めかねている生徒、その他気合いの入らない生徒がいると、講師室に来るように言います。その生徒が来ると、U君が教鞭をとる大学を教えてあげ、そこで黙って（モグリで！）彼の授業に出てくるように勧めます。毎年これを実行し、目を輝かせて報告に来る生徒がいます。彼は知らずして、浪人生たちにも掛け替えのない教育をしてくれているのです。

★U君の夢は、何時の日か東北アジアの国々と国民が国境の枠を超え、「恩讐の彼方」、広く協力をし合う未来を経済制度の角度から創り出すことです。第一回目に紹介し

たKさんは、朝鮮民族と日本民族の確執を超えるべく、一方では両民族の文化の源である中国に向かい、もう一方では両者の未来を孕む、ロシアのドストエフスキイに向かったのです。U君もまた、個々の国々の確執や枠を超えて、それらの国々や国民が互いに協力をし合う未来を思い描いているのです。最近の東北アジアの情勢は、各国間の溝をますます深め、彼の夢の実現を遠ざけつつあるように見えます。しかしこのような時にこそ闘志を燃やし、夢に向かうのがU君なのです。

★最後に、愉快的話ではありませんが、もう一つエピソードを記しておきます。私が以前に或る雑誌で、他の予備校の先生と対談をした時のことです。編集者から、それぞれの心に最も印象深く残る浪人生について語るよう依頼をされ、私の頭にすぐに浮かんだのはU君のことでした。私の話が終わると、暫くの間沈黙が支配しました。対談相手の先生も編集者も、強く心を動かされたのです。ところが、いざ雑誌が出ると、U君について語った部分は全て削除されているではありませんか。「しまった!」。私はすぐに電話をしました。

「済みません。とかく民族のことを取り上げると、問題になりますので・・・」
「あなたはジャーナリスト、編集者として失格ですね」

問答はこれ以上続きませんでした。私の絶望と、何よりも無力さ故です。

★「予備校 graffiti」を六回にわたり記す中で、私が改めて強く感じるものの一つは、我々人間が内に宿す偏見、差別意識の根深さです。前回、K君が行き当たったハンセン病に関する偏見と差別意識。D君が体験させられた学歴に関する差別意識。第二回目のK君の場合は、メキシコ人がアジア人に対して持つ民族的偏見と差別意識。更には第三回目のS君が突き当たった市民の冷たい眼等々 —— これらは皆、今回のU君が体験させられた、日本人が深く内に宿す民族的偏見・差別意識と同じ根を持つ、人間の内なる未熟で醜悪な悪魔性、或は小市民性と言うべきものでしょう。大学を目指す若者がひたすら勉強を重ねる場、予備校にいたるだけでも、このような問題に突き当たります。「闇」の深さを思わざるを得ません。

★皆さんにはまず、このような「闇」・「悪魔性」・「小市民性」が、他ならぬ我々自身の内に潜むものであることに気づいて頂きたいと思います。また「予備校 graffiti」に紹介した若者たちが、U君を始めとして、その「闇」を正面から見つめる目を持つばかりか、逃げずにそれと闘う勇気を持ち、更には人間の心が蔵する「光」を信じて前進する若者たちであることにも、是非気づいて頂きたいと思います。

(この項 了)

Y君、日本の近代を辿って

★今までの五回、私は「旅」とか「修業」という言葉をしばしば用いてきました。「旅」とか「修業」という言葉ほど、我々人間の試行錯誤と成長の過程を的確に表徴する言葉はそう多くないと思われるのです。今回紹介するY君の場合、二十代から三十代半ばにかけて、福沢諭吉から富士川游へ、そして富士川游から波多野精一へと、福沢以外は殆ど知られることのない、これら三人の先哲との取り組みの「旅」を淡々と続けてきたように見えます。日頃のY君自身、実に落ち着いた物静かな若者なのです。しかし彼の「旅」の足跡を辿る時、そこに浮かび上がってくるのは、この若者が内に燃やす情熱であり、彼の「旅」とは我々日本人が避け、そして斥けてきた「超越」・「實在する神」(後述)を目指しての、静かで激しい「修業の旅」であることが明らかとなるでしょう。黙々と研究と思索を重ねるY君に応え、私も彼の三つの旅を辿り、その足跡を出来るだけの確かな言葉で刻んでおきたいと思います。

★Y君が入学をしたのは慶應大学でした。私は以前ドストエフスキイの『夏象冬記』と取り組んでいた頃、この作家と慶應義塾の創立者・福沢諭吉が同年(1862)にした、二つの西欧への旅を比較し、エンリッチ講座でも取り上げたのですが(前回紹介したK君が参加した連続講座です)、Y君はこの大学で福沢と、そして私の研究会でドストエフスキイとの取り組みを続けます。大学の卒業後、東北大学の大学院に進んだ彼は、福沢の研究を更に押し進めると共に、夜行バスで仙台から東京の研究会に通い、ドストエフスキイにおけるキリスト教思想の研究も黙々と続けたのでした。

★大きな転機が訪れたのは、博士課程への進学の時でした。Y君は、福沢が「文明開化」と「富国強兵」という旗印の下に、また「一身独立」の精神の下に、日本の近代化のために果たした大きな役割を認識した上で、その日本が行き当たった限界をも見据え、いよいよ福沢が見なかったもの、一言で言えば「超越」の問題と正面から向き合い始めたのです。福沢的近代の限界性については、彼は既に大学生の頃から明確に認識していました。しかしなお慎重かつ綿密に福沢の思想と、彼が導いた近代日本の在り方の検討を続けていたのです。それだけY君が踏み出した一步は必然性を持ち、説得力のある一步だったと言うべきでしょう。

★博士課程での新たな一步。Y君が向き合ったのは富士川游でした。富士川游とは西洋医学を修めた医師であり、同時に日本の医療史に通暁する医学史家であり、更に

は親鸞の浄土真宗に深く帰依する宗教者でした。西洋的知性と東洋的宗教性を併せ持ち、人間の「病」に対しても肉体と精神という二つの方向から、つまり治癒と癒しの両面からアプローチをする富士川の問題は、西洋の合理主義と功利主義に立つ福沢の「カラリとした精神」とは明らかに異なるもので、Y君はこの富士川に自らを重ね、福沢が正面から向き合わなかった、そしてまた大部分の日本人も避け続ける「超越」の問題との取り組みを開始したのです。

「超越」の問題に向けて新たな「旅」を開始したY君。この旅に彼が携えるのは、「神と不死」の探求・人間の「罪と赦し」の問題という、ドストエフスキイ文学の核心を巡って十年以黙々と続けられた「修業」と、生来の鋭く繊細な音楽的・芸術的感性——これら二つの強力な「旅の杖」であることを確認したいと思います。

★博士論文を書き上げた後のY君は、医師であり医学史家であり宗教者でもある富士川の問題と人間性に魅せられ、なお彼との取り組みを続けつつも、「實在する神」という一点から厳しく「超越」の問題に迫る波多野精一に的を絞ります。

純粹哲学を担当する西田幾多郎に招かれ、京都大学で宗教学を担当し、キリスト教的宗教体験を土台とする宗教哲学を打ち立てた波多野精一——今では彼に注意を向ける人は殆どいません。しかし驚くべき博識と思索力を基に、「實在する神」の感受を不動の核とし、宗教的体験と認識の徹底的な論理化・言語化を試みた彼の仕事は、世界に誇るべきものです。福沢から富士川へ、そして波多野へ。Y君の旅は一見、これら三人の先哲を淡々と追う旅のように見えます。しかしこの旅の末に波多野に的を絞ったY君は、いよいよ「超越」の問題との取り組みに対して、背水の陣を敷いたと見るべきでしょう。ここには日本近代の「光」と「闇」を見つめ続けた彼の十五年間と、そこで黙々と続けられた思索の積み重ねがあり、そこから浮かび上がるのは、「超越」の問題に収束する一青年の熱い情熱と修業の旅の足跡です。

★ところでこのY君と、前回紹介したI君とは無二の親友であり、十五年もの間、互いに切磋琢磨を続けてきました。私の体験からすると、ドストエフスキイと聖書と向き合い続け、「實在する神」・「超越」の問題を巡って、波多野宗教哲学や一休禅を生涯の課題とするに至った二人は、現在の世俗化し蝸壺化したアカデミズム・学会、そして世間から容易には理解されず、むしろ無視され疎外されてしまう危険性が大きいと思われます。しかし彼らは平然と、そして黙々と勉強を続けています。

強い求道心と情熱に貫かれた学問の修業者たち、新しい「ドストエフスキイ世代」が誕生しつつあることを、私は今まで繰り返し記してきました。その「予備校 graffiti」の最終回、西洋と日本を股にかけた本質的思索を試みる若者たちについて、改めて報告が出来ることを心から嬉しく思います。

(この項 了)

予備校 graffiti ②

忘れ難い若者たち② — 痛快な、そして楽しい思い出 —

トルストイの『アンナ・カレーニナ』(1877)は、同時代の作家ドストエフスキイも絶賛した傑作ですが、その書き出しは実に印象的です。

「幸福な家庭は皆、似たものである。

だが不幸な家庭には皆、それぞれの不幸がある」

「予備校 graffiti」の最後は、前回の「忘れ難い若者たち① — 辛い思い出 —」とは対照的に、「忘れ難い若者たち② — 痛快な、そして楽しい思い出 —」というタイトルの下に6組、約10人ほどの若者を紹介したいと思います。

トルストイが指摘するように、前回の「辛い思い出」の場合は皆、それぞれが負の要素を含む微妙な問題に触れていたこともあり、私は取り上げた若者たちについて誤解を招かぬよう記述を配慮し、背景となる状況も出来るだけ詳しく説明をしました。しかし今回の「痛快な、そして楽しい思い出」の方は、最初の(A)の場合を除いては、比較的短い説明で済みそうです。

かと言って、ここに紹介する若者たちが能天気なお目出度い人たちだということではありません。それどころか彼らは、私の内で「闇」に対する「光」、「否定」を超えた「肯定」として端的に輝き続ける存在であり、既にその「輝き」そのものが、他に何も説明を必要としない「力」を持つのです。皆さんもこれらの若者たちに関する「痛快な、そして楽しい思い出」から、是非瑞々しい「力」と「喜び」を受け取って頂きたいと思います。

(A)「特急あずさ君」の「基礎貫徹」

★前世紀末の80年代から90年代にかけて、好調な日本経済と呼応するかのよう、予備校には自由で創造的な雰囲気強く脈打っていました。それを象徴するものの一つが、他の予備校と同じく、河合塾にも数多く開設されていた「公開単科講座」でしょう。この講座のことは以前にも記しましたが(「予備校 graffiti」二-⑨)、ここでは講師がオリジナル・テキストの作成を求められ、それと呼応してどの予備校や高校の生徒も講座のパンフレットを集め、自分の好みのテキストや講師を選択した上で、申し込みをしていたのです。この「公開単科講座」を核として、各予備校間での、また様々な高校間での、そして先輩と後輩間での情報の交換や、生徒の行き来も非常に活発化したのでした。しかしこれらの若者たちが親となり、その子供たちがスマホにしがみつくと現在では、もう想像もつかない光景となってしまいました。

★私が担当していたのは「基礎貫徹英語ゼミ」という名の講座でした。このゼミの特色は、名前の通り、英語の「基礎」の確認を徹底的に繰り返し、その上で雑誌 TIME や東大入試の英文を読み解くまでの「貫徹」を図るというものでした。こちら側から受講者の成績レベルを設定することはなく、彼らに要求した条件はただ一つ、きつとも頑張り抜こうという意志を持つことであり、あとは誰でも申し込み順に受講を許可しました。成績の最優秀者層から、英語が本当に苦手な生徒たちに至るまで、また他の予備校や地方の高校からも、様々な受講生が集まって来ました。一時は三つの校舎に講座が開設され、千人近くの生徒が参加をし、この講座は「キ・ソ・カ・ン」という名の下に、独特の熱気が渦巻く場となったのでした。

★授業時間は5時から7時半まででした。ところがぶ厚いテキストの「基礎貫徹」を果たすためには、どうしても9時や10時近くまではかかってしまいます。遠くから通う生徒や女子学生、更には門限の決まった寮生たちのことが気になり、当初は私も出来るだけ時間通りに終えようとしたのですが、それでは講師も生徒も共に「不完全燃焼」となってしまいます。するとこのことで、私に手紙をくれる生徒や、直接要望を伝えに来る受講生が現われました。今回のテーマ「痛快な、そして楽しい思い出」の中でも、とりわけ「楽しい思い出」を残してくれた若者たちです。

★長野の松本から通う現役生がいました。この生徒さんは、9時前になると授業の途中で退出する制服姿の高校生として、すぐにクラスの皆に知られる存在となったのですが、彼の手紙の趣旨はこうでした——自分が松本に帰る特急「あずさ」は、新宿駅を9時に出る。「基礎貫徹」の授業のある千駄ヶ谷校舎からなら、15分もあれば大丈夫だ。9時まででも10時まででも授業をして欲しい。自分が帰った後のことは次週、隣の先輩に聞く。遠慮をせずに「貫徹」をして欲しい！

★この現役生のことを授業で紹介すると、直ちに別の受講生が私のところに訴えに来ました。彼は静岡県の熱海市から通ってくる本科生で、普段もよく質問に来るユーモアと熱気に溢れる若者でした——先生、「特急あずさ君」（彼はこう呼んでいました）には感激しました。自分には11時半くらいに東京駅を出発する最終の「鈍行・大垣行き」があります（前回紹介したK君も愛用した、伝説的な夜行電車です）。たとえ授業が11時に終了しても問題はありません。是非延長をお願いします。電車の「脱線」は困りますけど、僕は先生の「脱線」は大好きです。遠慮をせずに「鈍行・授業」で脱線をして、ドストエフスキイやベートーヴェンや外国の話をして下さい！僕が先生の脱線を録音しておき、「特急あずさ君」にも聞かせてあげます（私の授業が「鈍行」でも「脱線」ばかりしていたわけでもないことは、ここに記しておかねばなりません）。

★その他、宇都宮や水戸から通ってくる浪人生や、寮長さんが門限を厳しく守らせる寮生たちも訴えて来ました。「時間など気にしないでいいです」「キ・ソ・カ・ンで完全燃焼をしたいです」「週最後の金曜日の授業、ここから全てが始まります！」
—— この熱気を前にして、私の躊躇は消えました。(千葉や木更津から通っていた「千葉太陽少年団」のことは、この後の(D)で改めて紹介をします)

★この「予備校 graffiti」で、私は日本の経済の高度成長期からバブル期について、どちらかと言うと、マイナス面の方に重点を置いて語ってきました。日本は太平洋戦争に続き、二十世紀最後の数十年間で「エコノミック・アニマル」としてバブルに突き進み、新たに国土ばかりか精神をも荒廃させ、嬉々として自らを小市民化^{プチ・ブル}させてしまったのです。しかしそういう流れの中でも、時代風潮に疑問を感じる若者たちは少なくなかったのです。彼らは公教育の場とは違う予備校の自由な雰囲気の中で、「公開単科講座」に全力投球をし、また河合文教研の主催するエンリッチ講座にも競って参加をし、大学入学後にはドストエフスキイ研究会に参加をし、人間と世界と歴史について本気で考えようとする若者たちだったのです。そして彼らを正面から受け止めようという職員さんたちもまた、多数いてくれたのです。

★私は、今までドストエフスキイ研究会に集った若者たちや、この「予備校 graffiti」で紹介した若者たちの多くが、「基礎貫徹英語ゼミ」で学んだ人たちであることを、改めてここに記しておこうと思います。そしてまた「基礎貫徹」ばかりでなく、広く様々な予備校に開設された「公開単科講座」のことを、そしてまたそこで学んだ若者たちと、彼らを支えてくれた職員さんたちのことをもここに記し、バブル崩壊から今に至る長い「失われた時代」の底にも、次代の再生に向けて、彼らの熱気が今もなお消えずに燃え続けているとの確信を記しておきたいと思います。彼らについての「痛快で、そして楽しい思い出」とは、私個人の「昔懐かし」的な回想に終わるものではなく、日本の再生に向けた「未来を孕んだ思い出」としてあるのです。

★「予備校文化論」を著わそうとする評者がこれからも出てくることでしょう。彼らが表面的情報や、自らの政治的信条や、気づかぬ偏見の上に立って論を張るのでなく、まずは広く予備校の日常的現実^{日常性}に目を向け、地に足の着いた情報の上に立って欲しいと思い、「公開単科講座」について、ここに記しておきました。

(この項 了)

(B) ドストエフスキイ読破と「OK」サイン

★予備校空間のドストエフスキイということで、硬派のドストエフスキイ青年T君に

ついて、その「痛快な」エピソードを報告しておきます。

★T君は或る私立大学の法学部に入学してから一年余りの間、河合塾の講師室に私を訪ね続けました。ドストエフスキイの作品を新潮文庫で一冊読むと、その都度その文庫本を手に私の許を訪れ、作品の感想を報告すると共に、文庫本の裏表紙に私が「OK」のサインを記すことを求めるのです。彼が通う大学と、浪人時代を送った校舎とは比較的近くにあるため、授業の空きが一つあれば駆けつけることが出来たのです。文庫本で一作を読了し、河合塾を訪れては私に短い感想を述べ、「OK」のサインをもらっては一礼をし、サッと大学に帰ってゆく——この繰り返しを一年余り。とうとう彼は、新潮文庫に収められたドストエフスキイの全作品を読破してしまいました。ドストエフスキイの主要作品を読む若者は少なくありません。しかし新潮文庫に収められた彼の作品全てを読んでしまったという若者は少なく、前回紹介した「ドスト制覇青年」を思い起こさせる快挙でした。

★あれから10年近く。彼は姿を現わしません。しかし私には、この「痛快な思い出」で十分です。彼もまた、この「ドストエフスキイ体験」を忘れることはないでしょう。書店で新潮文庫を手に取り、表紙のペローフが描いたドストエフスキイの肖像画を目にするたびに、私には彼の姿が思い浮かびます。ここにあるのもただの「思い出」ではなく、痛快な「未来を孕んだ思い出」です。

★「ドスト制覇青年」もそうでしたが、一人黙々とドストエフスキイを読み、ドストエフスキイの世界を自らの世界と重ね、様々な問題について思索を試みながら生きてゆく——これは決して容易なことではありません。しかしこのような若者が、新たな「ドストエフスキイ世代」として一人でも多く現われてくれること、これこそ私が夢見る日本の将来像です。彼らのような若者が大人になり、今度は新たに若者たちの相手をしてあげ、日本に「ドストエフスキイ体験」という「一粒の麦」をコツコツと播き続けてゆく——これ以上何を望むことができるでしょうか。

(この項 了)

(C)「合格判定E」を買いた浪人生

★続いて予備校ならでは「痛快な思い出」をもう一つ。つい数年前の春のことです。前年度教えたT君が、顔を輝かせながら報告に来てくれました。第一志望の医学部に合格した彼は、今年受験生に是非伝えて欲しいことがあると言います。

★彼は一年間全ての模擬試験で、第一志望校の合格判定が「E」しか出なかったのです。ご存知のように、河合塾の模試で合格判定が「A」と出れば合格は間違いなし、「B」

でもまずは合格圏内に入ったものと見なされます。しかし多くの受験生が、「C」や「D」の判定しか出ないのが現実です。「C」・「D」の判定を前にして、彼らは職員チューターさんやご両親に顔向けが出来ず、自らもしばらくは気落ちから立ち直れません。まして「E」というのは、もう「論外」と言われるのに等しく、多くの受験生から「死刑宣告」・「門前払い」として恐れられ、悲しまれるのです。この「E」評価を、T君は一年間を通じて一貫して取り続けたと言うのです。

★しかしT君は自らに言い聞かせたのでした。

「E」を取ったからといって、他人から自分の希望を抹消されるのは御免だ！
自分は最終的には第一志望校への評価を「A」にまで持ってゆくつもりだ！
その努力を続けている！ 自信もある！ 二月末まで待っていてくれ！

歯を食いしばって頑張り続けたT君は、とうとう「初志貫徹」を遂げたのです。
人間の努力の全てが統計的数値で推し測れるものではないこと、そんなものよりも人間の意志と自由の方が上にあること、このことを彼は、自分自身を実例として、一年をかけて見事に証明してくれたのです。

★大きな模試の結果が出て、合格判定が出された翌日の予備校の教室は、虚ろな目を宙に漂わせた受験生が満ち、講師の方も一瞬引いてしまうような白々とした雰囲気しらじらが支配する場となることがあります。そのような中、最終的な勝利に向けて内に火を燃やし、歯を食いしばって頑張り続けている「判定E」の生徒さんがここにはいるのだと思えることは、決して予備校の内に限定されるべき小さなことではありません。この「痛快な思い出」を、是非皆さんも共有して下さい。

(この項 了)

(D)「太陽少年団」と「ピーナツの情熱」

★公開単科講座「基礎貫徹英語ゼミ」に戻ります。授業の合間に、私はしばしば生徒さんたちに「朝日が昇るのと、夕日が沈むのとではどちらが好きですか？」と質問をしていました。『カラマーゾフの兄弟』には、聖者ゾシマ長老が夕日について語り、夕日の斜光の素晴らしさを何よりも愛すると語る、実に印象的な場面があります。いつの間にか「キ・ソ・カ・ン」において、このゾシマ長老と重ねての「朝日か？ 夕日か？」の質問が、私の「脱線」の際の「十八番」となっていたのです。この事実とこれから記す思い出が、具体的に何処でどう結びつくのか、今ではもう定かでないのですが、その曖昧さのままに記しておきます。

★千葉から、一人は更に遠くの木更津から、千駄ヶ谷校舎に通っていた三人（あるいは四人？）の本科生がいました。二学期の始めです。彼らは金曜日夕方からの「基礎貫徹」の授業を終えて、真夜中に帰宅をした土曜日、今度は朝からまた千駄ヶ谷校舎に戻り、ここで模擬試験を受け、それが終了するや千葉市の仲間の家に向かいます。そこで一晩中語り明かした彼らは、更にその足で「朝日を見よう！」ということになり、日曜の早朝、勝浦の海岸へ出かけて行ったのです—— これを書いていだけで溜息が出るほどの「荒行^{あらかぎょう}」です。若くなければ出来ません。

★朝日に感動した彼らは、その場で約束をし合ったのでした—— 残る半年の間、月に一回、ここで「朝日を見よう！」。

これ以降全員が、今までよりも一層勉強に打ち込むようになり、また様々なことを語り合い、翌春にはそれぞれが素晴らしい結果を残すこととなります。彼らからの報告を聞き、私は彼らを「千葉太陽少年団」と名づけてあげました。

★そしてこの「千葉太陽少年団」が契機となり、私自身、千葉校舎への出講を決めたのでした。千葉校舎は三多摩にある私の家からは遠く、泊りがけで出かけて行く必要があり、それまで出講の依頼に色よい返事をしていなかったのです。しかし「このような子たちがいるのなら、千葉に行こう！」—— その後私は、千葉校舎に二十年近く出講し、「千葉太陽少年団」たち以外からも、様々な楽しい思い出を与えて貰ったのでした。

★千葉の生徒さんたちは概してシャイで、なかなか打ち解けてくれません。戸惑った私は、当初彼らの姿勢を「ピーナッツの情熱」と呼んでいました。つまり千葉名産のピーナッツのように、味は抜群なのに、彼らは地中深くに、しかも自分の殻に閉じこもっていて、なかなか積極的に地上の光の下に出ようとしません。「君たちの千葉県は成田空港に土地を提供してあげ、無数の日本人を世界中に送り出しているのに、君たち自身は鎖国した江戸時代の日本人のように目も心も殻の中に閉じ込めて、ピーナッツのように地中深くに閉じこもっているんだ！君たちの情熱はピーナッツの情熱だ！」—— これは時々私が放った皮肉であり、何よりも「檄」でした。

しかし^{ひとたび}一度その殻が割れ、心が開かれるや、彼らからは驚くほどの情熱が迸り出てきて、それぞれの青春が輝き始めるのです。何重もの殻に閉じこもる彼らの在り方が分かるまで、私には数年がかかりました。その後は楽しい思い出の連続です。

★私は海外に出かける時、成田空港に向かう車中で「千葉太陽少年団」のことを思い、「ピーナッツの情熱」のことを思い、その他の様々な楽しい思い出を振り返りながら、私のピーナッツたちが大きく成長し、地上に現われ出て、広い世界の光の下で

その殻を弾けさせる瞬間を思い描くことを楽しみにしています。

★今年（2019年）、千葉県は度重なる台風によって甚大な被害を受けました。この心痛む光景をテレビで目にしながら、私はこのような時にも、彼らが決して負けてはいないこと、「ピーナッツの情熱」が自らを力強く地上に押し上げ、必ず立ち上がることを信じ、声援を送っています。（県民を打ち捨てて自分の別荘の「視察」に駆けつけたと言われる知事も、まずは自分のピーナッツの殻を大事にする千葉県民だと考えれば、ただ怒りの対象として弾劾するよりも、やがて殻を破り再生する日を待つ「未成年」だとして、受け容れてあげられるようにも思うのですが・・・）

（この項了）

（E）「キュアリアス ボーイ curious boy・好奇心坊や」、ベストの問い

★N君は、自分の質問はそそくさと片づけてしまい、その後は私のことについて次々と聞いてくる、と言うよりは熱心に「探索」を開始する少々変わった子でした。先生の出身地は？ 出身校は？ 年齢は？ 外国旅行歴は？ 好きな国、嫌いな国は？ 好きな建物は？ 好きな本は？ 好きな作家は？ 好きな音楽は？ 好きな絵画は？ 好きな食べ物？ 初恋は何時？ 奥さんはどんな人？ お子さんは何人？ 等々等々・・・

★勿論、一度にこれら全てを聞くわけではありません。彼にはその日に決めたテーマがあるらしく、系統的にサクサクと質問をしてくるのです。しかも何故か彼の質問には嫌味がなく、その「探索」の系統性には独特の「知性」さえ感じさせられます。つい私も乗せられて気軽に答えると、彼はフンフンと聞いていて、好奇心が満たされるや、ニコニコして帰ってゆきます。爽やかな一陣の風が吹き過ぎていったかのようで、残されるのは不思議な後味の良さでした。やがて私はN君のことを、秘かに「キュアリアス ボーイ curious boy・好奇心坊や」と呼ぶようになりました。

★N君はいわゆる「講師の追っかけ」などではなく、恐らく人と話すこと自体を生来の喜びとしていたのではないのでしょうか。大人にせよ若者にせよ、世に「話し好き」の人は数知れず、しかも自分の話ばかりする人が大部分で、真の「聞き上手」はごく稀にしかいません。「聞く・話す」は、フィフティ・フィフティが理想なのですが。

そもそも予備校という場は大学合格を第一の目的とする場であり、授業の質問以外に浪人生が口にするのは、勉強の悩みの訴えや、大学の情報を求めることや、志望する専門についての質問・相談が主で、話が自分中心となることは当然なのです（この問題については、「おわりにかえて」も参照して下さい）。N君の場合のように、講師に向かって質問を畳みかけてくるというようなことはまず起こりません。そんなわけで、好奇心を以って講師に語りかけ、質問をしてくる生徒さんがいると、こちら

もハッとさせられてしまいます。「この子は心の開いた子だな！」と。

★「^{キュアリアス} curious boy」から投げかけられた中で、最も驚かされた質問はこれです。

「先生、先生が一番好きな言葉って、何？」

これが私の人生で、自分が受けたベストの問いではないかと思います。平凡で常識的な私ですが、流石にこの時「愛」だとか「友情」だとか「誠」、或は「大志」だとか「努力」などの言葉は頭に浮かびませんでした。私は一瞬、身構えました。

★実は私は、この時N君がした質問と、ある意味で同じような問いを、当時も今も、ドストエフスキイに関して問い続けているのです。

「ドストエフスキイの究極の一語とは、何だろう？」

当時の自分にとって、それは「^{タスカ}憂愁」という言葉であり「^{バドボーリエ}地下室」であり、更には「^{プロ・イ・コントラ}肯定と否定」「^{トリックスチース}激震が走る」などでした。しかし彼からズバリ「一番好きな言葉は？」と問われ、私の内から飛び出してきたのは「^{ヴァイジョールイ}晴々とした」という形容詞でした。

★「^{ヴァイジョールイ}晴々とした」**весёлый** —— これは『カラマーゾフの兄弟』の中で、聖者ゾシマ長老とその弟子の青年アリョーシャを中心に用いられる形容詞です。ドストエフスキイ世界とは、罪や罰、殺人や自殺、死に至る病や狂気、貧困や泥棒、陰謀や裏切り、憎悪や背信、懷疑や不信等々・・・人間の陥る地獄・陥穽が「これでもかこれでもか」と繰り返し描かれ、その「闇」の中から「光」を求めるドラマが展開する世界です。そしてこの「^{ヴァイジョールイ}晴々とした」という形容詞こそ、難しい思弁や概念は措いて、「^{シヤスリーヴァイ}幸福な」とか「^{ラーダスヌイ}喜ばしい」とか「^{チーヒー}静かな」などの形容詞と共に、ドストエフスキイが最終的にその登場人物たちに与える「究極の一語」だと言ってよいでしょう。同じ問いを今出されたとしても、私はこの「^{ヴァイジョールイ}晴々とした」という一語を、ドストエフスキイの「究極の一語」として選ぶに違いありません。その一語をこの青年は、二十年ほど前に、私の内なる「闇」の中から、図らずもごく自然に引き出してくれたのです。

★私の答と簡単な説明を聞き、「^{キュアリアス} curious boy」は満足げに帰ってゆきました。それ以降彼と私の間で、この言葉についてもドストエフスキイについても、更なる会話が交わされた記憶がありません。またその後彼からの連絡も一切ありません。しかしいつも記すように、この人生で縁あって出会いを与えられた人との間に、一瞬でも

絶対の瞬間が与えられた以上、その出会いを更に引き伸ばすべき理由を私は見出せません。互いに、それ以上の何を望むことができるでしょうか？ このような瞬間の絶対性は、我々に別れの潔さをも自然に与えてくれるのです。

★この「^{キュアリアス} curious boy」を、尽きぬ「探索」に導いた「好奇心」とは何だったのか？ その後私は折につけこのことを考えています —— およそ人間同士の間で交わされる問答の中で、相手の一番好きな言葉とは何かを尋ねること以上に、美しく素晴らしい問いがあるでしょうか？ この時質問者は、その言葉の奥に潜む、相手の心の最も大切なものの開示に耳を傾け、心を凝らしているのです。ここにあるものが「好奇心」だとすれば、それは最も上質で高貴な「好奇心」であり、コトバの真の意味で「探求心」とも呼ぶべきものでしょう。今では私はこの青年が、ドストエフスキイが予備校に、また私の人生に遣わしてくれた「探索」の使徒、「聖なる好奇心・探求心」を片手にした天使だったのではないかと考えています。

(この項 了)

(F)「^{かかし}案山子少年」

★「千葉太陽少年団」、「^{キュアリアス} curious boy・好奇心坊や」と続く「楽しい思い出」の線上で、「^{かかし}案山子少年」のことも報告したいと思います。残念なことに、私は彼の名前を忘れてしまいました。その代わりに、彼は「^{かかし}案山子少年」という名で、私の内に今も鮮やかに生きています。「痛快な、そして楽しい思い出」を残した若者たちの多くが、ニックネームの形で心に刻まれているのも、思えば不思議なことです。

★この若者は、「ダサイ」私でさえも、「お洒落だな！」と思うような服の着方を常にしてくる生徒さんでした。上から下まで真っ黒に決めて登場し、教室の皆をハッとさせるも時があるかと思うと、清潔感に溢れる白いシャツ一枚で、ひたすら辞書を引いている時もあれば、紫っぽい色で妖しげな雰囲気^{あや}を漂わせている時もありました。身に着けるものがお金をかけたブランド品などでないことは私にも分かります。「センスがいいのだな！」と私は思い、毎回彼が学ぶ教室に行くのを楽しみにしていました。他の生徒さんたちも、きっと同じだったと思います。

★二学期が進んで秋たけなわの頃、教室に入った私の目に飛び込んできたのは、洗い晒しの紺の^{かすり}縞のようなものを着てニコニコしている彼の姿でした。よく見ると、どうもお百姓さんの野良着のようです。両腕の後ろから背にかけて、一本の細長い棒を通して見えるようで、両肩が一直線に見えます。

「今日は、君、どうしたの？ 何なの？」

「今日は、僕、案山子^{かかし}です。刈り入れ時ですから！」

教室は笑いに包まれました。私も、この日ほど心楽しく授業をしたことはありませんでした。それから二十年以上、秋が来ると必ず、この「案山子少年」は私の心の田圃^{たんぼ}に現れて、ニコニコと微笑みかけてくれるのです。

この「案山子少年」の内から溢れ出ていたものとは、「気障さ^{きざら}」とか「目立ちたがり」などの精神とは全く異質のもの、健康で屈託のない青春の輝き、或いは人間の内なる「童心」、無垢で明るい「悪戯心^{いたづら}」だったのだと思います。「楽しい思い出」の「楽しさ」というものが何処から来るのか、彼は見事に教えてくれます。

★私は何時の日か、今までの死者も今生ある者も、この地球上の人間全てが、否、動物や植物も含めた「万人万物一切」が相集い、^{あいつど}「案山子少年」・「案山子少女」、或いは「悪戯小僧」・「悪戯小娘」になって、世界中到る所の田圃^{たんぼ}で、秋の陽光の下、収穫を祝い合う日が来るという「夢」を持ち、その日のことを楽しみにしています。その日とは地上の不条理と謎の一切が解き明かされる日であり、個人的には田圃の真中でニコニコと微笑む「案山子少年」ばかりか、「千葉太陽少年団」や「curious boy^{キューリアスボーイ}」たちに、この地上での出会いと別れを超えて再会出来る時だと思っています。

★この「夢想」、或いは終末論的「夢」を私に与えてくれたのはドストエフスキイです。彼はその遺作『カラマーゾフの兄弟』において、「闇」の中に輝く究極の「光」として、ヨハネ福音書（二 1-12）を基とし、「ガリラヤのカナ」と題された祝宴を描き出します（七 4）。この祝宴については、私が稚拙な言葉であれこれと説明するよりは、是非皆さんが自らこの作品を手にとられて、自ら確認して頂きたいと思います。これがドストエフスキイ文学の究極の一場面であり、これを表わす究極の一語があるとすれば、それは正にあの「晴々とした^{ヴァイショールイ}」という形容詞以外にないでしょう。

（この項 了）

予備校 graffiti ③〇

Eさんの「笑顔」と、「汚れちゃった悲しみ」

★Eさんが「笑顔」を絶やさないと私が気づいたのは、彼女が辛い体験を重ねている間のことでした。ドストエフスキイ研究会で一年間、サブ・テキストとして取り上げた遠藤周作と出会った頃の彼女は、この作家とドストエフスキイに体当たりをし、キャンパス・ライフを目一杯に謳歌する、心身共に健康な女子学生でした。

ところが大学卒業と共に或る難病に捕らわれてしまったEさんは、三十代に入るまで辛い日々を送ることを余儀なくされます。この頃のことです。私は時おり予備校を訪ねてくれるEさんが、決して悲しい顔も沈んだ表情も見せず、常に笑顔を絶やさないことに気づきました。その後幸いにも病気は快方に向かい、Eさんは教員採用試験にも通るのですが、なかなか望み通りの教職は与えられず、なお辛い日々が続いたのです。しかしこの間も、彼女から決して笑顔は消えませんでした。

「予備校 graffiti」の最後に、Eさんをその「笑顔」と共に紹介したいと思います。このことは私に、今まで記した「痛快な、そして楽しい思い出」の延長線上で、改めて人間の「笑顔」について考えさせずにはおきません。

★Eさんがドストエフスキイ研究会を「卒業」して、何年も経った時のことです。或る時、友人のAさんと研究会を再び訪れてくれました。Aさんは結婚のことを、Eさんは教員採用試験合格のことを知らせに来てくれたのです。ところが突然サッと研究室のドアを開けて登場した彼女は、何といつもの笑顔に加えて、頭にターバンを巻いているのです。私は日頃研究会のメンバーに、ドストエフスキイと聖書との取り組み以外にも、音楽や絵画の分野で一級の芸術作品と取り組むことも勧め、当時は皆で数年間にわたり、フェルメールの「デルフトの風景」と向き合い続けていました（「予備校 graffiti・二・⑥」を参照）。これはオランダ・ハーグのマウリッツハイムに展示され、同館のターバンを巻いた「真珠の首飾りの少女」と並び、この画家の最高傑作とされることは皆さんもご存知と思います。この日も「デルフトの風景」を検討しようとしていた矢先に、突然ターバン姿のEさんが飛び込んで来たのです。前回の最後に紹介したI君も丁度そこに居合わせた一人だったのですが、この名うでの「悪戯小僧」でさえ、今も「あの時は度肝を抜かれました」と語っています。I君ならずとも、研究会にターバン姿で「不意打ち」をかけたあの瞬間の、Eさんのあのお茶目な笑顔を忘れる人はいないでしょう。

★私はこれを記している今、上に紹介した「案山子少年」のことも一緒に思い出して

います。そこで記したように、この時Eさんを突き動かしていたものとは、私や後輩たちを驚かして「受け」を狙おうとする「邪心」などではなく、何よりも青春の健康な輝きそのもの、人間誰もが内に持つ「童心」であり、またそこから発動して来る無垢で明るい「悪戯心」とその「笑顔」であったことは、私ばかりか、そこにいた誰もが感じ取ったことではないでしょうか。長い病と、それに伴い就職もままならぬ辛さの底から、Eさんは「悪戯心」と「笑顔」を掴んで起ち上がったのです。

★人間が内に宿す「童心」・「悪戯心」、そこから送り出される「笑顔」——このように記すと、Eさんは強く否定するに決まっています。「私の笑顔なんて、そんな高尚なものではありません！ 私の内は醜いもの、邪心で一杯ですよ、先生！」。

しかし我々の個人的な表情そのものである「笑顔」が、内なる「童心」・「悪戯心」と結びついた時、個を超えた普遍的な表情として輝き出るということが、どうしてあってはいけないのでしょうか？ ルネッサンス以来、レンブラントやフェルメールやゴッホなど、オランダ絵画の巨匠たちが表現してきたものとは、正に個を通して顕われ出る普遍、その個が日常生きる永遠そのものだったのではないのでしょうか？

少々煩わしいことを記しましたが、理不尽な運命によって重い軛を負わされ、それに伴い就職もままならぬ辛さの底から、私はEさんが、上に述べたように、「童心」・「悪戯心」と「笑顔」と共に起ち上がったのだと考えています。

★Eさんは今、或る高校で国語を教えています。いわゆる「受験校」とは遠く、卒業と共に大部分の生徒さんが社会に出て働くこの高校では、生徒さんたちは授業に身を入れることは少なく、平気で教師を茶化し、逆らい、教室を「学びの場」として成立させてはくれず、傍から見ても、彼女の毎日は決して楽なものではありません。先日私が「教えるということは、身を削ることですよ」と言うと、彼女は笑顔で大きく頷いていました。しかしその目には涙も光っていました。決して声高に弱音や愚痴を漏らす人ではないだけに、その背後にある辛さが窺い知られたのでした。

以下では彼女の「笑顔」と、その「笑顔」が新たに直面させられることになった人間と世界の「病」、殊に日本社会の「病」について、二つのエピソードを通して考え、「予備校 graffiti」の終わりしたいと思います。

★一つは夕日の写真についてです。

Eさんが私に送ってくれるメールには、よく添付ファイルが付されていて、開けると夕日の写真が現われてきます。以前から天気と時間が許す限り、夕日を撮り続けているのだそうです。校庭から撮った夕日。休暇で訪れたハワイの、抜けるような空に透明に輝く夕日。雲の合間に一瞬顔を出した夕日・・・

Eさんの愛読書『カラマーゾフの兄弟』には、「千葉太陽少年団」でも記したよう

に、聖者ゾシマ長老とその弟子アリョーシャの魂にとって、沈む夕日の斜光が如何に大切な役割を果たしているかが、実に印象深く描かれています。彼らにとり夕陽の斜光とは、人間と世界が抱える病を癒す力の象徴なのです。Eさんも一日の終わり、夕日に向かいシャッターを切ることで、その日出会った悲しさや怒りを断ち切り、夕日から新たな力を貰おうとしているのでしょう。

その日の疲れや憂さを、酒やテレビやゲームで晴らす人もいます。私はそのような一日の終わりも決して否定はしません。しかし一人空を見上げ、夕日の写真を撮るEさんの姿の方に軍配を上げたくくなります。夕日に向かいシャッターを切り続ける彼女の精神の底から生み出されるもの、それが「童心」・「悪戯心」と結びついた彼女の「笑顔」であり、そこには人間と世界の病に正面から向き合う力が、たとえそれは未だ微かなものであろうとも、既に宿されていると思うからです。

★もう一つのエピソードは、Eさんの授業についてです。

ドストエフスキイを読み続け、遠藤周作を愛するEさんが日頃どのような授業を展開しているのか、私は「好奇心」(?)を掻き立てられるのですが、先日その授業について、彼女が珍しくメールでレポートをしてくれました。中原中也の詩「汚れちまった悲しみ」(『山羊の歌』所載)を授業で扱った時のことです。

汚れちまった悲しみに
 今日も小雪の降りかかる
 汚れちまった悲しみに
 今日も風さえ吹きすぐる

この一聯を始めとして全部で四聯。そこで八度繰り返される「汚れちまった悲しみ」。中原中也のこの絶唱が生徒さんたちの心を掴んだのです。日頃教師の言葉などは平気で無視し、私語を交わし、スマホをいじり、興味のあることにしか関心を示さない生徒さんたちが、耳と目どころか、その心さえも「汚れちまった悲しみ」という表現に釘付けにされたのです。更にEさんが生徒さんたちに、この詩の続編を書いてみるよう勧めると、何とそれに一人ひとりが応えてくれたのだそうです。

★その内の数篇がEさんからメールで送られてきました。どれもが心を揺り動かすものばかりです。しかし残念なことに、それらは生徒さんたちが自分たちの教師Eさんに対して示した魂の表白であり、またこの授業のことも、Eさんがそっと私だけに打ち明けてくれたものです。「汚れちまった悲しみ」の顛末については、Eさん自身が、何時の日か、何らかの形で、皆さんに報告が出来るようになる日を待ちたいと思います。私はそれが、ドストエフスキイと遠藤周作との取り組みを土台とした

Eさんの教育体験の総括となると思っています。つまりそれは彼女の新たな闘いの報告、彼女が直面させられた時代の病との闘いの報告となることでしょう。

- ★その報告をするEさんを想像する時、私の脳裏には「泣き顔」も「怒った顔」も浮かんできません。「汚れちゃった悲しみ」を越えた向こうにある、彼女の「笑顔」しか浮かばないのです。

しかしここで私が再び、Eさんの「笑顔」とは「童心」・「悪戯心」と結びついた「笑顔」なのだと言って、能天気でお目出度い「終わり」を仕立て上げることは許されません。繰り返しますが、彼女の「笑顔」とは「汚れちゃった悲しみ」を通り抜けた先に浮かび上がるべき「笑顔」なのです。つまりそこには彼女が向き合う生徒さんたちの生があり病があり、彼らの生と病を包む家族の生と病があり、そしてそれらの生全てを包む日本社会とその病があるのです。これらとの正面からの直面と対決を越えたところに生まれる「笑顔」—— そこに至るまで彼女が歩むべき道は、なお依然として長く険しいものがあることを、ここに記しておかねばなりません。

- ★日本の文部大臣がこの秋、大学入試改革に当たり、受験生は「身の丈に合った」試験を受ければよいと語りました。高みから思慮無き言葉を発するこの大臣は、日本の若者たちの「身の丈」をどのように捉えているのでしょうか？ Eさんが日々向き合う生徒さんたちは、文部省検定の教科書に向かうどころか、教科書になど殆ど目さえ向けぬ若者たちであり、そもそも大学進学そのものが不可能な境遇に置かれた若者たちなのです。彼らの「汚れちゃった悲しみ」と、彼らをそこに追いやる日本社会の「病」とを知り、それを自らの悲しみとすべきは、この大臣に他なりません。

「汚れちゃった悲しみ」の先に我々が求めるべき、そして生きるべき「笑顔」は果たして何処に、また如何なる形で見出されるのか？ —— ここにEさんが直面し、かつ我々に課す重い「課題」があり、繰り返しますが、そこには人間と世界と歴史が、殊に今の日本が抱える重い「病」が潜むことを忘れてはならないでしょう。この「病」について、私はこの連載で様々な角度から浮き彫りにしてきたはずです。

- ★最後に私はEさんに倣い、「予備校 graffiti」を読んで下さっている皆さんに一つの「宿題」を課して、この連載を終えたいと思います。

「汚れちゃった悲しみ」—— 中原中也のこの詩に、一語でも、一表現でも、一聯でも、自分自身の続編を書いて下さい。期限は自由とします。しかしこの宿題は「予備校 graffiti」の読者にとって **must** であり、書かなかった人は「落第」を覚悟して頂きます。

(この項 了)

(「予備校 graffiti」了)

予備校 graffiti・余録・⑥

★「おくられつおくりつはては木曾の秋」。これは芭蕉、元禄元年（1688）の一句です。様々な旅において様々な縁を結んだ人たちを見送り、見送られ、また幾多の季節を見送り、見送られた芭蕉。今新たに彼が踏み入ってゆくのは、木曾の秋の底知れぬ寂寥と、その奥に佇む姥捨山^{うばすてやま}であり、更にこの悲しくも懼^{おそ}しい人生の奥津城^{おくつぎ}にかかる月です（『更科紀行』）。そこで芭蕉が詠おうとしたのは、万物凋落の秋を包み込み、更に万人万物一切を滅びの冬に送り込む大きな「時」の流れだったと言えるでしょう。つまり彼は、木曾の秋の悲愁が極まるころ、生の究極の実相との出会いを「姥捨山の月」に求めたのだと考えられます。

★春に始めた連載「予備校 graffiti」も今回で最終回。季節は既に秋から冬になろうとしています。

①から⑩まで、延べ5人ほどの思い出を記してきましたが、半年にわたる連載中に、なお数多くの若者のことが思い出され、中には夢に現われ「忘れたのですか？」と語りかける人たちもいました。人生で互いに軌跡を切り結ばせる人は数知れず、しかもやがて大部分の人たちは心の片隅にそっと消えてゆく—— 出会いと別れが織りなす生の感慨は深く、底知れぬものがあります。

★「予備校 graffiti」の終わりを、芭蕉の「木曾の秋」の一句と重ねる時、そして私自身の人生の秋・冬とも重ね合わせる時、そこから吹き寄せてくるのは、一つには「おくられつおくりつ」の人生が与える測り知れぬ寂寥感であることは否定出来ません。しかしそれと同時に、私が今触れさせられているのは、それら出会いと別れ一切を包み込み、「時」がもたらすもう一つのリアリティ—— 底知れぬ豊かさと深さの感覚であることも事実です。この「生」の豊饒と不思議を捉え、明晰な言葉を以って表現すること、私はこれが「時」から自分に課された新たな「宿題」だと考えています。

★最後にもう一度「予備校 graffiti」に戻ります。

何度も記してきたように、経済の高度成長期からバブル期にかけて、物質的繁栄と引き換えに、我々日本人は確実に精神的衰退の道を辿り、ドストエフスキイの作品もまたその棲息すべき場を失ってしまったかのように見えます。このような状況の中で、大学への入学後再び予備校空間に戻り、ドストエフスキイ研究会で学んだ若者たちは、ドストエフスキイと彼が「命」とするイエスを正面から受け止め、人間と世界と歴史について、そしてそれらの内に潜む「病」について、広く深く考えようとしてきたのです。この「予備校 graffiti」は、そのような彼らの青春の報告を目的の一つとしたのですが、結果として、彼らの青春と切り結んだ一つの「ドストエフスキイ論」ともなったように思われます。未来の日本を背負う若者たちが、これをドストエフスキイ世界への旅に携える「杖」としてくれるならば、更にまた日本の現状とその未来を深く憂う人たちが、ここに記された若者たちの（ドストエフスキイとは直接の関係がなくとも、その）様々な姿から新たな「希望」と「力」を与えられるならば、私としてはこれに優^{まさ}る喜びはありません。

おわりにかえて

私の浪人時代の夏 — 朝顔の十秒の凝視 —

「予備校 graffiti」で、「私が出会った青春」というタイトルの下に、様々な若者たちとの出会いの思い出を記してきました。最後に「おわりにかえて」、もう一つの青春の思い出、半世紀前に私自身が浪人時代の夏に体験したエピソードを記しておきたいと思います。この連載で私は、専ら若者たちを紹介する「黒子」に徹しようとしてきました。今さらここで屋上屋を重ね、自分のエピソードを持ち出すのは憚られるのですが、これによって「予備校 graffiti」に一つの時間的な「奥行き」が与えられればと思い、そしてまたこの連載によって若者たちが、日本社会の陥った「病」と闘うための勇気を少しでも与えられればと願い、敢えて記すことにしました。

皆さんと同じように予備校時代、私も未熟な自分を抱え、受験勉強の進展もままならず、鬱屈した日々を送っていました。そのような中、恩師から一つの決定的な体験を与えられたのです。あれからもう半世紀が経ちますが、私はこれが今に至るまで自分の生涯を刺し貫き、励まし続けてくれた体験であったと思っています。またこれは、私の若者に対する姿勢の原点となった体験であり、更には「予備校 graffiti」を支える背骨ともなった体験であると自覚しています。この連載とその背景を理解する上で、一つの「参考」としてもお読み下さい。

朝顔の十秒の凝視

★田舎から上京しての浪人生活。右も左も分からぬ「異郷」の中で、時はアツと言う間に過ぎてゆきました。「夏は天王山だ!」。予備校の一学期が終わり近くになると、私はこう強く心に期し、様々な計画をギッシリと立てたのでした。

ところがいざ夏休みが始まると、三疊間の下宿は蒸し暑く、体調は狂い、近くのスーパーの騒がしさで勉強は^{はかど}捗りません。隣家の犬の吠え声も堪え難いものでした。漸くとれた有名講師の講習は自慢話や余談ばかりで、隣に座った人は貧乏ゆすりの連続。計画は狂いまくってしまいました。受験生が歩む夏の「常道」です。

★「思い切って一週間ほど故郷に帰り、気分転換をしよう! 故郷では恩師の小出次雄先生とも(※文末を参照)、浪人が決まった春以来、久しぶりにお会い出来る!」。荷物をまとめ、夕方電車で飛び乗り、数時間後に着いた駅からお宅に直行した私を、読書中だった先生は「よおッ」と心から喜んで迎えて下さり、一晚中私の話に耳を傾けて下さいました。

★短い夏の夜の闇が白み始めたころ、先生が言われました。「君、家に帰る前に、僕の散歩につきあうか?」。射し始めた陽の光の中、街の外を流れる大きな川の堤防を歩いてゆくと、蒸せ返るような夏の草々の中に朝顔の花が咲いています。

「見たまえ、芦川君、素晴らしいな！」

「はい、素晴らしいですね！」

私の相槌に、突然、先生の怒りが炸裂しました。

「この馬鹿もの！ 嘘をつくな！」

私には訳がわかりませんでした。

★人っ子一人いない朝の堤防に、先生の太く高い声が響き渡りました。

「君は朝顔など見ていないだろう！ 君は久しぶりに僕を訪ねてくれた。だが、この一晩中君の話したこととは何だ。成績が思うように伸びないとか、下宿が暑くて騒がしいとか、予備校がどうだこうだとか、ただただ自分の愚痴を垂れ流すに過ぎなかったではないか！」

「久しぶりに僕を訪ねて来ても、君は夜の突然の訪問を詫言もせず、六十五歳になる僕の安否一つも尋ねはしなかった。ただただ自分の話をしていただけだ。君ら若い連中は自分、自分、自分、自分しかない。ゴキブリ以下だ！」

「そんな君に、この朝顔の美しさが見えるのか？ 上っ面の答えなど返すな！」

「浪人して東京にゆくと、そんなに自分のことだけが大事で可愛くなるのか？ 志を持って東京に出かけて行ったのではなかったか？ 馬鹿もの！」

この上なく優しい先生は、同時にこの上なくおそろ怖い怒りの人でもあったのです。私は恥ずかしさと悲しみで、その場に泣き崩れてしまいました。

★その後、私も予備校で教えて気づいたのですが、なるほど受験生は自分のことしか考えず、自分のことしか話さない余裕のない人が多いのです。「キュアリアス・ボーイcurious boy」の項でも記したように、この心の狭さ・心の閉じは、やはり未熟さ・エゴイズムに他ならず、克服されるべきものでしょう。

この未熟な、しかも我々の内に深く根を張る自己中心主義エゴイズムに対して、最後に一つのアドバイスを記したいと思います。怒りのカミナリの炸裂を受けた後、その場で泣き続けている私に対して、恩師はこう語って下さいました。

「芦川、浪人生が自分の成績を気にしないでどうする。大いに気にしろ！
 だがいいか、自分のことばかり気にしている小ささと狭さ、そして醜さにも
 気づくのだ！」

「君に一つアドバイスをしよう。それは自分のことばかり考えている日々の中
 で、自分を離れ、自分以外の素晴らしいものに目と心を向ける時間を少しで
 も持つということだ。毎日、十秒でいい。花でも、木でも、雲でも、夕日でも、
 人でも、文章でもいい。‘これは！’と思う素晴らしいものを見つけたら、
 とに角黙って、それを十秒間見つめるのだ。ちっぽけで醜い自分は消えてゆ
 き、その素晴らしさが向こうから君に乗り移って来てくれるだろう」

「分かったら、さあ、今からあの朝顔をもう一度、十秒間、見詰め直せ！」

あの夏の朝、私は人生への決定的な目覚めを、先生とこの十秒の凝視から与えられたのでした。

★ドストエフスキイ世界に向けて、私の背を押して下さったのは恩師小出先生でした。その後ドストエフスキイもまた、先生の「十秒の凝視」に続いて、私に時間というものを持つ無限の豊かさと懼しさを教えてくれたのでした。このドストエフスキイ的時間についても、ここに記しておきます。

詳細は一切省きますが、29歳の時ドストエフスキイは逮捕され、広くは「国家転覆罪」で死刑の判決を受けます。刑場に引き出され、柱に縛りつけられ、他の囚人たちと共に銃殺の号令を待つ五分間——この体験について、彼は後に繰り返し回想することになります。

最後の五分間を、彼は2分-2分-1分の三つに分けたのでした。最初の2分間は仲間との別れのため、次の2分間は自分の全生涯を振り返るため、そして最後に残された1分間は、太陽の光で金色に輝く遠くの大聖堂の円蓋をじっと見つめ、その光と一つになるためです。

しかし最後の最後、突然皇帝からの使者が登場します。全ては皇帝が仕組んだ懲罰劇だったのです。ドストエフスキイは刑一等を減じられ、シベリアへの流刑を宣告されます。この五分間の「死刑体験」と、続く十年間のシベリアへの「流刑生活」。これがドストエフスキイ文学を深め、豊かにした決定的な事件だと言えるでしょう。

★十秒間の凝視。五分間の死刑体験。そして十年間の流刑生活——これら三つの時間単位は、今に至るまで私の思考の基準枠、全てを測る原尺であり続けています。ここから見てゆく時、人間と世界と歴史というものが、如何に深さと豊かさと懼しさに満ちたものであるかが浮かび上がり、畏怖の念と共に、生きる智慧と勇気を与

えられるのです。

★最後に、恩師小出先生が記して下さった文章を付け加えておきます。これは既に「予備校 graffiti」第一回目の「はじめに」で紹介しているのですが、連載の「おわりにかえて」、私の心もそこに重ね、改めてもう一度提示させていただきます。私はこの恩師の言葉がドストエフスキイの言葉だとしても、何ら違和感を覚えません。ドストエフスキイ文学もまた究極は、我々に「晴々とした」生への励ましとしてあるのです。

「若者よ、人生に惚れ抜け。
人生はやはり素晴らしかった」

(了)

※小出次雄先生（1901-1989）は、京都大学において西田幾多郎の下で哲学を、波多野精一の下で宗教学を学び、その後はキリスト教との取り組みを核に、哲学・宗教哲学・芸術の分野で思索と創作を重ねられました。

その絵画デッサンの6点を、毎回「予備校 graffiti」の最後に「もう一つの青春」として紹介してきました。その思想については、拙著『ゴルゴタへの道』（新教出版社、2011）の第一部・11と第二部第1章に記されています。

後者は太平洋戦争末期、西田幾多郎・小林秀雄・小出次雄の三者が、囿らずもドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』とイエスに焦点を絞り、それぞれの思索を展開した事実を取り上げ、各人の思想の本質と連関を論じたものです。

予備校 graffiti・もう一つの青春・⑥

小出次雄画



このデッサンが描かれた紙の質と、その古さから判断すると、恐らくこれは1930年代から40年代にかけての作品と推測されます。描かれた女性が誰であるかは不明です。今まで紹介した五つの作品と較べると、この女性像は第三回目の聖母像と目されるものと同一方向にあり、この上なく穏やかで高貴な静謐さを湛えたものです。小出先生にとって最も心の落ち着く古典的な女性美が描き出されたと言えるのではないのでしょうか。